



いま、本郷・駒場で学ぶ学部学生は約1万6000人、大学院学生は約1万1000人、そして両キャンパスだけでなく全国に散らばる教職員も含めるとその数7700人強。これが、構成する人びとの数から見た東京大学である。40年前、大学院学生は学部学生の15パーセント程度でしかなかったから、この数字は「大学院を重点とする大学」に変貌しつつある今日の東京大学の姿をよく物語っている。

にもかかわらず、学部学生が東京大学の最大多数を占めるという事実は、今のところ変わらない。

特集 東大生のいまむかし

東大生のいま、むかし——。「東大生」として括られることに窮屈さを感じるひとりひとりの若者がいるはずだ。「東大生」としてことさら話題にされることに違和感を感じる者も少なくないだろう。「いまどきの」東大生を語る語り口に「底意」を読みとる者もいるにちがいない。

それもこれも承知のうえで、まずは「東大生」を、時間の流れのなかでとらえてみようとするささやかな第一歩が、この特集である。東京大学の内と外とのあいだでの、東京大学のなかでの、そしてひとりひとりの「東大生」の胸のうちでの、議論のタネとなることを期待したい。

特集 東大生のいまむかし

生活実態調査 にみる東大生

一九五〇年度からほぼ半世紀にわたり、継続的に実施されてきた学生生活実態調査。その興味深い調査結果から、社会状況とともに変化する東大生の姿がユニークに浮き彫りにされる。



本学の学生生活実態調査は、一九五〇年度からほぼ半世紀にわたって継続的に実施されている希有な調査である。この調査は、戦後の混乱期に貧しい学生たちの学生生活を、少しでも豊かで充実したものにしようという問題意識にもとづいて立ち上げられた。初期の、手書きのガリ版印刷で仕上げられた報告書の赤茶けたページには、当時の学生たちの経済状態が事細かに分析・記述されている。五〇年代後半から六〇年代にかけては、それまで経済生活に限定されていた調査内容に、生活時間やサークル活動の実態といった、大学生生活全般にかかわるものが含まれるようになる。また、年度によっては、女子学生や大学院学生を対象とした調査が企画され、多様な学生たちの生活実態が明らかにされる。さらに、紛争後の七〇年代になると、不安・悩みや友人関係、入学動機や就職希望といった、学生たちの意識にかかわる質問が多く設定されるようになる。これは、学生をめぐる主要な問題状況が、経済問題から生きがいや対人関係の問題にシフトしたことを物語っている。

そして八〇年代以降は、語学学習や海外旅行といった国際化への対応、コンピュータなどのニューメディアの利用状況、ボランティア体験や社会問題に対する意識など、現代の社会状況に合わせた設問が毎年工夫され、付加されるようになってきている。

ここでは、「東大生は、どこから来るのか」「東大生は、どのような学生生活を送ってきたのか」「東大生は、何を考えてきたのか」という三つの問いを設定し、東大生の姿に迫ることにしたい。ただし、設問項目の内容や個々の項目のワーディング自体が変化している場合が多く、ここでの比較はあくまでも

大ざっぱなものであることをあらかじめお断りしておきたい。

東大生は、どこから来るのか

本調査では、初回から継続して、対象者に「家庭の所在地」と主たる家計支持者の職業をたずねてきた。この結果をもとに、「東大生は、どこから来るのか」という基本的な問いについて考えてみよう。

図1は、家庭の所在地を地域別にまとめたものである（かつての調査は男子を中心に実施されていたため、第一回から第二九回の数字は「男子」のみのものを、第三四回以降は「男女」のものを示している）。

東大生の出身地域には、それほど顕著な変化はみられないというのが第一印象である。しかし、ていねいにみればいくつもの傾向があらわれてくる。まず第一に、「東京」出身の学生が減少傾向にある。六〇年代なかばまで四割以上を占めていたが、七〇年代に入ってから三割以下になっている。逆に、「関東」の占める割合はほぼ一貫して増加傾向にある。また、一時期は一桁にとどまっていた「近畿」からの入学者は、このところ微増している。

これらの数字が物語るのは、以下のような事実であろう。戦後の改革によって各地に大学ができ、東京大学の東京ローカル化が一時進んだものの、その後の学歴社会化の進行にともなう、受験競争が全国化し入学者の東京集中傾向は和らいだ。「関東」の数値の上昇は、一方で東京を取り巻く関東圏のベッドタウン化による人口増加の影響とみることができ、他方では地元志向がより強い「女子」が含まれるようになった結果と考えることもできよう。

出身家庭の職業については、一九八四年に

学生は、社会に出ること 自体にハードルを感じている



佐々木 毅

先生が卒業された1965年の調査では、生活のためにアルバイトをするのは過去の話、とまとめられています。実感としてはいかがですか。

佐々木 東京オリンピックで人々の生活が変わったといわれるけれども、学生までそうなるには、もう数年必要としたように思います。われわれが大学にいて豊かさを感じたのは、やはり紛争のときですね。たとえば僕が学生だった頃

は、ほとんど学生服です。それが紛争のとき、「大学の権威の象徴みたいなものは着るか」ということで変わった。自家用車にゲバ棒を積んでくるのを見て、ビックリした記憶があります。さらに変わるのが70年代から80年代でしょう。象徴的なのは、大学の建物がいかに貧しいかを、学生が公然と言いついたことですね(笑)。それまでは、総合図書館をはじめ、自分の住んでいるところよりもはるかに立派だと、みんな思っていたわけです。ところが、だんだん「ここが一番貧しいぜ」という感じが出てくる。これは大学にとって大問題です。

学生の出身家庭にも、かなり大きな変化がみられます。

佐々木 良し悪しは別として、出身階層が均質化されてきたのではないのでしょうか。管理職層が日本社会にエスタブリッシュされて、こうしたシステムの上層部分の子弟が入学してくる。社会的流動性における上昇通路としてのモードよりも、むしろ再生産の感じが強くなっています。

それにつれて、学生の意識も変わりつつあるようです。

佐々木 昔だって、誰がどこに就職した、自分はどうする、といった話はもちろんありました。しかし、今は就職そのもの、社会に出ること自

体にある種のハードルを感じているのではないのでしょうか。ちょっと話を大きくすると、大学受験に向けた生活様式というのは、人工的につくられたものですね。生活も豊かになってきたから、社会の厳しい現実を見ないでもやってこられるわけです。ところが、就職のとき一挙に変わる。就職を通じて、人生と社会の問題が全部出てくるような仕掛けになっている。それが就職そのものへの不安になるのでしょう。専門職志向も、このことと無縁ではありません。自分に対する不安感があるので、大きな組織のどういう地位に就くかということよりも、自分はどういう能力をもっているというほうが、生活感覚にビックリくる。いざとなっても何とか食べていけるということでしょう。こうした学生の意識と、たんなるホワイトカラーを必要としなくなりつつある社会とが、相互促進関係で学生の専門職志向を高めているのではないのでしょうか。実際、法学部でも司法試験を受験する学生が非常に増えています。反面、公務員試験のほうは減少がみえますね。

ささき・たけし 1965年法学部卒、大学院法学政治学研究科長・法学部長。

をA~Eの五段階に分けて捉えることが行われていた。たとえば、第六回調査(一九六五年)では、必要度A「アルバイトをしなれば自分の生活は成り立たない」という者が一三パーセント、必要度B「アルバイトをしなれば学業を続ける見込みは全くないが、生活は辛うじてできる」という者が一四パーセント存在していた。四人に一人以上が、バイトをしなければ生活がたちいかないレベルで学生生活を送っていたのである。その中身は、今と同様「家庭教師」が多かったようであるが、少なからぬ学生が「勉学の時間が不足する」とか「過労のため健康が心配」という困難・不安をかかえていたようである。

それが、すでに一九六五年の時点で、つぎのような解説がほどこされるようになっていく。「最低生活を維持するためにアルバイトを求めたのは過去のことです。今日ではむしろ、スキーに出かけたり、レコードを買ったりするたに、アルバイトは必要なのである。」調査項目に、はじめて「耐久消費財」の所有状況が加えられたのが、一九七一年の第二回調査であった。しかしその段階では、「テレビ」「冷蔵庫」「洗濯機」「パーセント」という水準であり、「クーラー

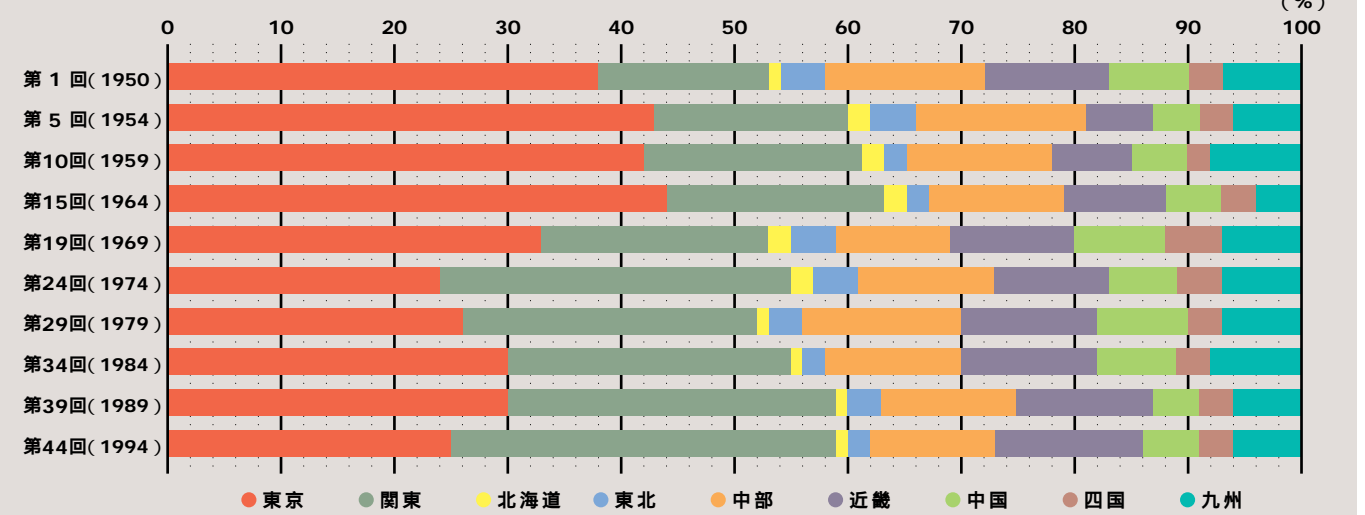
【表1】読書について

	最近興味深く読んだ本	よく読む雑誌
第1回 (1950)	きけわたつみのこえ 細雪 チボ一家の人々 ロマン・ロランのもの 風と共に去りぬ	文藝春秋 世界 新潮 中央公論 小説新潮
	好きな作家	
第20回 (1970)	高橋和巳 三島由紀夫 井上 靖 北 杜夫 夏目漱石	朝日ジャーナル 少年マガジン 世界 文藝春秋 中央公論
第29回 (1979)	夏目漱石 北 杜夫 芥川龍之介 太宰 治 井上 靖	週刊朝日 びあ 朝日ジャーナル 文藝春秋 少年マガジン
第39回 (1989)	夏目漱石 司馬遼太郎 村上春樹 太宰 治 アガサ・クリスティ	ビッグコミックスピリッツ びあ アエラ 少年ジャンプ ニューズウィーク

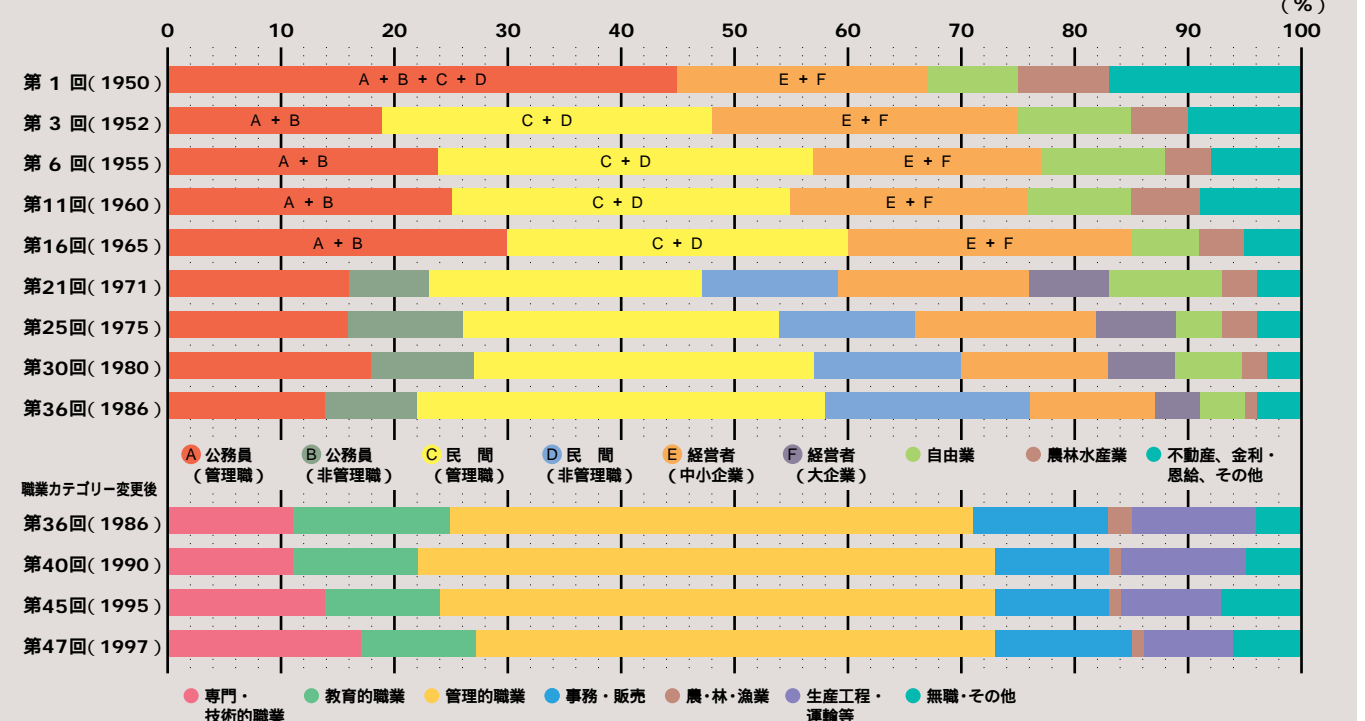
「エアコン」「電話」「パソコン」といった選択肢はまだ用意されていない。最近(一九九六年)の第四六回調査では、ステレオコンポ(八四パーセント)、「ウォークマン」(七三パーセント)、「テレビ」(五九パーセント)、「電話」(五四パーセント)、「ビデオデッキ」(四四パーセント)、「パソコン」(四一パーセント)など、情報通信や映像音楽にかかわるパーソナルメディアが急速に普及している。

表1は読書について、「好きな作家(最近興味深く読んだ本)」と、「よく読む雑誌」の二項目をピックアップし、四時点にわたって整理したものである。調査がはじめて行われた一九五一年の東大生たちは、「文藝春秋」「世界」「中央公論」という、いわゆる三大総合雑誌を愛読していた。それが、一年後には「少年マガジン」があらわれ、二年後には「びあ」が登場し、約三年後の八九年には、

【図1】出身地



【図2】家庭の職業



東大生は、どのような学生生活を送ってきたのか

初期の調査には、アルバイトの実態を探ろうとする企画が目立つ。とくに五十年代には、学生個人にとってのアルバイトの必要度を

実施された第三四回の時点で、職業カテゴリが抜本的に改められたため直接的な比較はできないが、図2から以下の傾向を読み取ることができよう。もっとも目につくのは、年を追うごとに「給与生活者」(AからDの四つのカテゴリの合計)の割合が増加していることである。一九五一年代前半には四割台であった比率は、五十年代後半から五割台に、七十年代後半には六割台に、八十年代には七割台に到達した。こうした傾向は、わが国全体の職業構造の変化を如実に反映するものであるが、つとに指摘されるように、東大生の場合、親が管理的・専門的な仕事についている比率がとりわけ高い。八十年代後半以降は、半数前後が「管理的職業」の親をもっている。「専門・技術的職業」を合わせると、九十年代には全体の何と六割以上がそれらの階層の出身者となっている。

前述した職業カテゴリの見直しは、国勢調査の分類に準拠することによって、ほかの調査との比較を可能にするためのものであった。実際、一九八六年の第三六回調査では、東大生の家庭の特徴が全国調査の結果と比較されている。そこで明らかにされているのは、管理職(とくに公務管理職)層出身者の多さであり、農業を含む自営業や民間非管理職層からの輩出率の低さである。東京大学は、歴史的にみて、全国から「恵まれた」家庭の子女を集める役割を果たしてきたといつて、まちがいはないだろう。

隔週のマンガ雑誌「ビッグコミックスピリッツ」が東大生の愛読書ベスト1になったのである。

表2は、「自宅外生」の一月あたりの平均支出額とその内訳をたどったものである。食費と住居費を分けるようになった第二九回調査から、家計にシめる住居費の割合が上昇をはじめ、第四七回には何と四パーセントを超える水準にまで達する。これは、自宅外生のすまいが下宿や学寮からアパートやマンションにシフトし、学生気質が大きく変化したことのあらわれとみることができよう。それに呼応するように、勉学費(勉学に必要な書籍代など)の占める割合が下降し、衣料費という費目が設定されるようになった第三九回以降は、六、七パーセントで両者が拮抗するような状況になってきている。今どき服代と同じだけを本代に使うのは東大生くらいだろう、という見方もできなくはないが、それにしてもやや寂しい結果ではある。

【表2】1カ月あたりの支出額とその内訳(自宅外生) (単位:円、カッコ内は%)

	支出総額	食費	住居費	衣料費	勉学費	教養娯楽費
第5回(1954)	8,760	5,180 (59)	-	-	1,160 (13)	880 (10)
第10回(1959)	11,470	7,300 (64)	-	-	1,270 (11)	1,700 (15)
第15回(1964)	19,600	11,900 (61)	-	-	2,090 (11)	2,990 (15)
第19回(1969)	30,560	18,790 (62)	-	-	4,230 (14)	3,250 (11)
第24回(1974)	63,200	40,100 (63)	-	-	7,900 (13)	8,300 (13)
第29回(1979)	89,600	32,600 (36)	23,500 (26)	-	10,800 (12)	12,100 (14)
第34回(1984)	110,700	35,900 (32)	31,700 (29)	-	11,100 (10)	17,400 (16)
第39回(1989)	138,800	37,300 (27)	45,800 (33)	10,000 (7)	10,400 (7)	20,000 (14)
第44回(1994)	154,600	41,700 (27)	59,100 (38)	10,000 (6)	11,000 (7)	19,500 (13)
第47回(1997)	153,100	39,400 (26)	62,500 (41)	10,400 (7)	9,800 (6)	18,000 (12)



東大生といわれたとき、どの部分を負えばよいのかむずかしい



文学部4年 宮崎刀史紀さん

—— 現在、学生のアルバイト事情はどうですか。
宮崎 僕の周りには苦学生という言葉を実感できる学生はなかなかいません。アルバイトをする理由も食べるためというよりも、雑誌やCD、旅行などのためという面が強いと思います。また、コンビニや喫茶店といった、家庭教師や塾講師など以外のバイトをしている東大生も増えて

いるようです。これを社会勉強といえば格好よいですが。
—— 学生の持ち物も大分変わったようですね、携帯電話とか。
宮崎 たぶん僕らが、大学で初めて携帯電話を持った世代です。僕も、ついに加入しました。サークルやゼミの連絡などのほかに、「いま、暇?」といったようなことまで実に多くのやりとりが行われています。電子メールも同様です。「飲み会の情報が来ない!」といったように、持っていないことで情報網から取り残されるように感じることもあったくらいです。
—— 「よく読む本」も、総合雑誌から情報誌へという変化があります。
宮崎 コンビニで情報誌を見て、それから買い物というのが、今の大学生の行動として基本ですよ。僕が所属している東京大学新聞でも、昔に比べれば軟派な記事が多くなりました。僕は大学院進学を希望していることもあり、関係のありそうな論文を読むことはありますが、毎月必ず総合雑誌を買うということはないです。
—— 4年生ともなると、やはり心配の種は就職活動ですか。
宮崎 文系だと3年生の年明け頃から、ちらほら就職の話が出はじめて、3月になると戦争突入

という感じです。4年生の夏休み前まで、友達同士が会ったときの話題はもっぱら就職で、大学生というよりも就職活動生みたいな感じになります。
—— 宮崎さんにとって、いまどきの「東大生」とは、どのようなイメージなのでしょう。
宮崎 「東大生というの、いわゆる普通の大学生なんだ」といいたくもあり、「いや、やっぱり東大生は違うんだぞ」といいたい部分もあるわけ。本気で学問の先端を目指し、あるいは様々な目的のために図書館で勉強三昧という学生がたくさんいて、そういう人々と共に学べるというのは東大生としての誇りです。だからといって、東大生は勉強だけの人か、というそうでもない。「大学生」として立派に遊び、悩み、生きているわけです。ですから、「東大生といわれたとき」にどの部分を負えばよいのか、とてもむずかしい気がします。ましてや「東大生でしょ?」といわれたとき、われわれは半ば発言を禁じられているわけです。「君は何大生?」とは、なかなか聞けないですよ(笑)。

みやざき・とき 文学部行動文化学科(社会学)4年、東京大学新聞社編集部員。

東大生は、何を考えてきたのか

意識にかかわる項目が多く設定されはじめたのは、学生紛争が終結した七十年代にはいつてからのことである。一九七三年のオイルショックの年に実施された第二三回調査では、東大入学にまつわる意識に焦点があてら

れた。その時点で、「どつしても入りたかった」と答えた者は全体の四四パーセント、それに対して、「だめなら他大学でよかった」と答えた者が三八パーセント、そして、「なんとなく」という答えが一八パーセントであった。そうした分布状況は、今日にいたるまで変わっていない。

「入学動機」については、一八八十年代までの上位群は、「スタッフ、設備の充実」「国立大学である」「難関を突破したかった」で不動であるが、九十年代にはいつて、学生たちの入学動機はやや変化をみせているようである。すなわち、新たに設けられた「社会的評価が高いから」「東大の伝統や雰囲気にあこがれて」といった項目への回答が目立つようになり、いわば「東大のブランド性」への積極的な評価がみられる。かつては「難関突破」という色彩も強かったものだが、今日ではそうした発想はあまりはやらないようである。

表3は、在学中の「不安や悩み」についてたずねたものである。年代によって項目や回答方式に若干のバラツキがあるものの、各回における上位五項目を並べてみた。一見して気がつくのは、かつては「人生の目標・意義」や「自我の確立」などといった根源的な人生への問いが上位にあったものが、今日では「就職」「進路・進学」「勉学(成績・単位等)」といった、「目の前のハードル」的なものが上位をしめている。また、「性

異性・恋愛」が第五位とはいえ、第三九回以降でランクインしているのも目を引く。煩悶青年から現代的若者への変化とでも、形容できようか。
サークル活動についても、今日では、友人を得たい「居場所をつくりたい」「異性と交際する機会を持ちたい」といった理由で加入する者が目立っており、「人間性を磨きたい」とか「真剣に人生を考えたい」といった古典的な理由はかけを潜めるようになってきている。
最後に、学生たちの進路意識・就職意識についてである。学生たちに進路希望をはじめて聞いた一九七三年の第二三回調査では、「企業」「三三パーセント」「公務員」「二五パーセント」「自由業」「二パーセント」「教育職」「一五パーセント」その他「八パーセント」であった。いまだ学生紛争の余韻がさめやらぬ時期であり、企業就職の不人気が目につく結果となっている。職業選択の際に重視する要因としては、「適性・能力・専門が生かせる」「やりがいのある仕事」「生活の安定」「社会の幸福に役立つ」「他人から拘束されない」の順に、多くの学生の支持を集めている。



志水宏吉(しみずこうきち) 学生実態調査委員会委員長、大学院教育学研究科助教授

それから四半世紀を経た一九九七年に実施された第四七回調査を、それと比較してみると、どのような傾向がうかがえるであろうか。端的にいうなら、学生たちの就職意識は不思議なほど変化していないようなのである。すなわち、希望の職業としてもっとも多いのが「大学・官公庁の教育・研究職」「二四パーセント」であり、以下「専門職(医師・弁護士など)」「二パーセント」「技術職」「二パーセント」「公務員」「一パーセント」とづく。選択理由も、多い順に「自分の特技・能力や専門知識を活かされる」「人を助けたり社会に奉仕する」「安定した生活が保障される」「組織にしば

【表3】不安や悩み

	1位	2位	3位	4位	5位
第12回(1961)	人生の目標・意義	卒業後の進路	自我の確立	人とのつきあい	才能
第26回(1976)	人生の目標・意義	卒業後の進路	自我の確立	才能	人とのつきあい
第32回(1982)	卒業後の進路	人生の目標・意義	将来の職業	人間関係	性格
第39回(1989)	就職のこと	勉強のこと	進路・進学	人生の目標・意義	性・異性・恋愛
第45回(1995)	就職のこと	進路・進学	人生の目標・意義	勉強	性・異性・恋愛

注: いずれの回も、選択肢の中から、「最も大きな問題(不安や悩みの対象)と感じられるもの」として選んでもらったものである。

本郷の主

に聞く

佐野時計店 佐野利一さん

昔の学生さんは、学問に熱中している雰囲気がありましたよ。一人で孤独に勉強していた。個人で学問に向かっていくという感じだったんです。



東京大学の歴史とともに六五年

どことなくノスタルジーを感じる法文二号館の地下、食堂の向かいに並ぶ店のなかに、時計屋さんがあるのをご存知だろうか。時計屋さんといっても、きらびやかな時計を並べる時計屋さんではない。時計修理専門の店そこで、もくもくと細かい作業をつづけるのが佐野利一さん。若い頃はさぞかしもてたと思われる笑顔の素敵な時計職人さんだ。

昭和六年に父親が開業したこの店に、昭和八年から勤めているから、佐野さんは六五年の間、東京大学で過ごしていることになる。「この六五年で一番印象的な出来事ですか。そうですね。昭和一八年だったかな、学生さ

んが兵隊にもっていかれた学徒動員ですかね。講堂の前が当時は広場になっていてね。一人くらしい召集される学生さんがそこにずらっと並んでね、総長のお話をお伺いし、そのあと隊を組んで宮城（皇居のこと）前に行進するんです。そこでほかの東京中の学生と東条首相の訓辞を聞きましてね、家に戻って二、三日して出征ですか。私はそのとき二五歳で、それまでに野戦に五年近くいってまして、戦場の大変さを身にしみえて知っていましたから、かわいそうでね。それも、戦争でいくらか役に立つということ、法文経の学生が連れていかれたんですよ。そのときは涙がこぼれましたね。なにしろ何も知らない若い学生さんなんですから。」

時計屋の主人とお客さんの立場と控えめにおっしゃっているが、佐野さんに愛用の時計を直してもらうためにわざわざ遠いところからくる客も多いようだ。東京大学の表向きのことならば、だいたい何でもご存知という佐野さん。とても八十一歳とは思えないほどの元気で、今日も東京大学の歴史を、時計とともに刻んでいる。

キャンパスの主からみた東大生

本郷、駒場、それぞれのキャンパスで長年にわたり、東大生と触れ合い、そして東大の歴史そのものを見続けてきたキャンパスの主。

そんなおふたりに、東大とともに歩んだ人生を振り返りながら、語っていただく

東大生気質のいま、むかし。

聞き手 飯田泰雄、小川明子 大学院人文社会系研究科社会情報学専攻修士課程

特集 東大生のいまむかし

駒場の主

にきく

元教養学部職員 石山恭枝さん

最近は先生も学生も職員もみんな忙しくして、会話や議論が減ってしまっています。学生の特権は、社会に出る前に距離をとったり、考えたり議論できるということだと思つてます。

青春時代から三 余年

一気に駆け抜けた駒場

六本木にある東京大学生産技術研究所にお勤めの石山恭枝さんは、一九六五年から一九九八年まで駒場の体育教官室で会計兼庶務を担当された。

「私は定時制の夜間の高校にいてまして、その四年生のころからこちらで仕事をやるようになりまして。勤めはじめ、東大の学生さんが一生懸命勉強しているのを見ていたら勉強したくなってきましたよ。それから夜間の大学に通いだしたんです。だからはじめのうちは、昼は職員、夜は学生という二足のわらじをはいていました。」

そのあと、駒場に三 年以上勤務されました。

「一番印象的だったことはなんでしょう。それはもう大学紛争です。私は昼は職員で夜は学生でしたから、学生がバリケードを張っているなかを出動しようとする、スト破りじゃないかと疑われて、もめたこともありまして。体育教官室にも学生がやってきて、いつまでも先生が戻っていらっしやらないので、学生たちに乱暴されているんじゃないかと心配したりしましたが、先生方は根気強く学生たちにつきあっていたらいいですね。」

そのころと現在では、学生の変化も著しいといわれます。長い駒場での経験から、いかがですか。

「そうですね、世代的なちがいは、私自身にも経験があります。体育館の鍵の管理をしていたときです。昔の学生は『卓球場の鍵を貸してください』と、欲しい鍵の名称をきちんと聞いていたんですが、いつ頃からか、ただ『鍵』とだけ取りにくるようになりました。そういう学生には、『鍵ってどの鍵、鍵はいっぱいあるわよ』というふうには、できるだけ喋らせるようにしました。これは少子化現象や受験競争の激化と影響しているんじゃないかと思えますね。いつからか、親や先生が先回りして子どもの心配をするようになったような気がするんです。一方で、今の学生は優しくなってきたように思います。嫌なことでも手伝ってくれることも多いです。」

当時と今の大学で特筆すべきちがいは何でしょうか。

「私は『大学』という雰囲気がどんどん失われてきていると思っています。大学紛争のことを話しましたが、ああいった会話や議論というのが今こそ必要なんじゃないですか。最近は先生も学生も職員もみんな忙しくして、会話や議論が減ってしまっています。学生の特権は、社会に出る前に距離をとったり、考えたり議論できるということだと思つてます。東京大学は、そういう意味でも、施設や先生方に恵まれているはずなんですけど、石山さんにとって、今後の目標はどのようなことですか。」

「本当に個人的なことですが、私は体育研究室に勤めたことよって仕事面ではもちろんのことですが、人としてのお付き合いをはじめめとして多くのことを学ばせていただきました。とても感謝しております。」



いしやま・やすえ 1945年千葉県に生まれる。1965年から東京大学教養学部勤務。現在は東京大学生産技術研究所に勤務、同人誌にエッセーを書くことを趣味としている。



3



2



1

© OSAMU HASHIMOTO

東大生の祭

東大生の二大イベント、五月祭と駒場祭。ポスターやパンフレット、そしてそこに記される統一テーマは、社会への強烈なメッセージであり、時には社会を映し出す鏡であった。

特集
東大生のいまむかし

東大には、本郷と駒場のキャンパスこの祭りだけでなく、学生寮にも祭りがある。ここでは、全学的な祭りである五月祭と駒場祭をとおして、東大の今と昔を比べてみよう。

五月祭、駒場祭関係で東京大学史料室に残っているもっとも古いものは、一九五九年の第一回駒場祭のプログラムである。戦前にはじまった五月祭については、一九六三年の第三七回プログラムがもっとも古い。独占資本主義下における「大学」不在の大学からの報告」が、その統一テーマであった。この年は部分的核実験停止条約が調印され、ケネディ大統領が暗殺された年でもある。

東大紛争あるいは闘争中の一九六八年の駒場祭の資料は残っていない。混乱の中で収集できなかったであろう。とめてくれるなおつかさん」で話題になったことときのポスター（一）は、作者の画集から引用したものである。入試が行われなかった一九六九年の五月祭は中止になっている。

二度のオイルショックを経験した一九七〇年代の中頃までは、生硬で、長い文章の統一テーマが好まれていたが、徐々に言葉づかいに変化が表れてきた。たとえば、一九七五年の五月祭は、生きた現実の中の「我ら燃え上がる理性の群れ火！歴史の激流のただ中に／築き上げよう／我らの真実を！／我らの時代を／我らのものにするために！」というテーマであったが、一九七九年の五月祭では、「平穏な日々への眠りの影に、科学の旗の下に集おう、さあ、新しい風を！」とかわってきている。

一九八〇年代にはいと生硬な表現は姿を消し、駒場祭のテーマあるいは委員会アピールは、「平和・真実・自由 きみのために、ほくのために」（一九八二年）、「ヒト／ヒト／コマバサイ／ヒト」（一九八三年）、「パラレルワールド／橋架けて」（一九八四年）、「きみと、はなしがしたいんだ」（一九八七年）のように、短かい呼びかけ調になってきた。そして、馬鹿野郎、感性だけがすべてじゃない」というアピールが一九八六年の五月祭でなされていた。感性の時代を迎えたのかもしれない（一九八七年の五月祭ポスター）。

一九八五年のプラザ合意以降バブル経済を謳歌したこの時代は、一九八六年の流行語大賞に選ばれた「新人類」が出現した時代でもある。新人類の発想だろうが、一九九〇年の駒場祭のアピールは、「駒場に来た／東大生を見た／」と主客が入れかわっている。

一九九二年から一九九八年までの五月祭にはテーマもアピールもない。言葉が訴える力を失った反面、一九九四年の五月祭プログラムの表紙（二）や一九九七年の駒場祭のイラスト（三）に見るように、より直接的なビジュアルな表現が好まれるようになってきた。

感性の時代をもたらし経済成長が終わわり、超氷河期とも形容される就職状況で、産業・社会構造の激変を体感している学生たちにとって、再生への望みを託した「あ、」が一九九九年の五月祭のキーワードであった。



7



6



5



4